

巻頭言

教習所とF-1ドライバー

日本作業療法教育研究会副会長
YMCA 米子医療福祉専門学校作業療法士科
酒井ひとみ

「シーラカンスになるまでこの職場で働くんだ。」と思っていた臨床現場から離れ、養成校の教員になって、14回目の新学期を迎えた。「養成校教員の役割ってなんだろう？」って、教員になりたての頃から変わらず、同じことで引っ掛かっている。

よく運転免許の教習にたとえて、学内教育や臨床教育のことを考えたりする。つい先日も、臨床推論を中心にした臨床実習を1年後に控えた新3年生と準備のためのゼミ活動を開始した。このゼミの長期目標を、「助手席に指導教官が同乗した車で、一般道路で周りの自動車や通行人の邪魔（迷惑）にならないように、まがりなりにも運転できるようになる。」とゼミ生と一緒に目標を立てた。さしずめ、学内教育は、構内での講義や実車練習で、臨床実習が一般道路での実車練習と位置づけられるのだろうか。

奇しくも、最近傾倒している内田樹氏が著した「先生はえらい」（ちくまプリマー新書）という中学生や高校生を対象にした本の一節の「教習所とF-1ドライバー」が目に留まった。教習所の教官は、はたして「先生」か？ 彼らは自動車運転技術という大変有用な技術を教えてくれるが、卒業した瞬間に教官の名前も顔さえ忘れてしまうのではないか。一方、同じ自動車運転技術でも、仮免を取った後に、鈴鹿でたまたまF-1ドライバーの教えを受ける機会があったとすると、それがたとえ半日の講習であったとしても、その後すっかり名前を忘れてしまうことはないし、むしろ機会ある毎に、その人への感謝を口にする。この違いは何か？という問いだった。私は、ワクワクしながら読み進んだ。要するに教習所で学んだのは、卒業検定に合格する水準の運転技術で、免許証をもらえる最低限度の技術がクリアーできること、それが学習の目標であり、それを教官から獲得した。F-1ドライバーは、ハンドリングやギアチェンジの基礎をクールに教えただけなのに、彼から一生忘れられない何かを学んだ。違うのは、一方から「定量的な技術」を学び、一方からは「技術は定量的なものではない」ということを学んだから。F-1ドライバーは、「運転技術には『これでいい』という限界がない」ということと「運転は創造であり、ドライバーは芸術家だ」ということを伝える。これは、プロなら必ず初心者に教えるはずのことだと述べている。

さてさて、私の命題である「作業療法士を養成する教員の役割とは？」にここで戻ることにする。資格を持たなきゃ、ただの兄さん・姉ちゃん。だから、「君は他の人と同程度に達した」ということをもって評価する。作業療法の道に窮まりなし。だからこそ人は創造的でありうる。だから、「君は他の人とどう違うか」という点で評価する。

「これが出来れば大丈夫」と「学ぶことに終わりはない」、この両者を同じ教員が必要に応じてコウモリのように演じられるのか？

またまた、「専門職である作業療法士を育てるってホント難しい。」という言葉が締めくくりにきてしまった。

さあ、これからまた、ゼミだ！ 今日のはどっちを演じようかな～